
そしてきみは今日も歌う...

咲蘭華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そしてきみは今日も歌う…

【Nコード】

N16580

【作者名】

咲蘭華

【あらすじ】

オリ主×ツナです！ ボンゴレファミリーとオリ主が繰り広げる、いっぱい笑えて、ちょっぴりホロツとくる。そんな恋愛ストーリーです！

まだまだ未熟者なのでアレですが…どうぞ読んでくださいね！

動き出した（前書き）

初回です！

コメ等もよろしく願います！

動き出した

「あなたは運命を信じますか？」

そう聞いてまず思いつくのは「運命の赤い糸」が多いと思う。
わたしもそう思うし。

けど…運命っていうのはなんの前触れもなくやってきて…
それまで平和な日常だったのに突然波乱万丈な生活がやってきてし
まう…

そう、わたしのように……

「誓うよ。絶対にきみを泣かせたりなんかしないって。」

あれ…？この男の人…誰？

頭が茶髪のツンツン頭で…

なんでだろう…わたしすごく幸せそう…。

ザザッ

！

急にフラッシュが走り、場面が変わる。

ここ…いつもわたしが寄り道する公園…」

「すごい！綺麗な歌声！聞きほれちゃったよ！」

あれ…？さっきの人。今度はちょっと幼くなってる。

そしてまたフラッシュがかかる。

今度は暗い部屋…ここ…どこ………？

まるで牢屋みたい……

「美歌——！！」

「んっ！？」

P P P P … P P P P …

頭の上で目覚まし時計がうるさくなっている。

あれ…ここ…わたしの部屋………？ だよね？

窓からこぼれる木漏れ日。

そんな月曜の日の朝。 っていうか月曜って学校行くのおっくうになるよね。

「ふあゝあ。おきなきや、学校に遅刻しちゃうつ」

あ！ご紹介遅れましたっ！ わたしは天音美歌^{あまねみか}中学2年生！14歳です！

性格…は自分ではしっかりしているほうだとは思っているんだけど、周りからしてみたらどうやら天然らしい…^^； そんなことないのに…。

「いってきます！」

きづいた方はいるかと思いますが…

わたしの家には両親がいません。（きつぱり）

共働きで海外に行っているのです。よく仕事の内容は分からないんだけど…

でも、月1で帰ってきてくれるたんびにお土産も買ってきてくれるし、仕送りも毎月してくれるから生活に困らないので、とりあえず触れておかないようにする。

だって、聞いてもあまり教えてくれないし。

「いい小春日和ですな~~~~ねむ~~~~」

そののほほんと通学路を歩いていると、

ゴツッ

誰かにぶつかって転んでしまった。

「いっつつつ…」

「あ、ごめん！大丈夫？」

「ひゃ…ひゃい…」

そう、手を差し伸べてくれた人は…

あれ…どこかで見たこと…

その男の人の特徴は、わたしと同年代の男の子で頭は茶髪でツンツン。

気の弱そうな顔をしている。

あ…この制服は…並盛中学校かな？

「本当にゴメン！どこかケガしてない？」

「うん！大丈夫！あなたこそ平気？」

「うん…オレは大丈夫。ほんとにゴメンね！じゃあ！」

「うん！」

気の優しそうな男の子だったな…。

また会えるといいな…♪

そんな思いを胸にはせながら、わたしは学校へと向かった。

そしてときは流れ放課後に。

「はあ…。つかれたなあ。こんな日は公園に寄って…きもちよく1曲歌ってかえろっ♪」

そう、わたし実は合唱部で歌うのが好きなんです♪

歌うとストレス発散になるから、よく歌ってく。まあ学生ってス

トレスと常に一緒だからね。うん。

わたしの学校の友達で「わたしの恋人はストレスよっ♪」なんていつているくらいだもん。

「よーしっ歌うぞ！」

気持ちよく歌っていると、誰かが拍手をしてくれた。

「相変わらずうまいな。」

「リボーンくん！」

このしゃべれる赤ちゃんはリボーンくんといって、ちょうど一ヶ月前くらいからこの公園にわたしの歌を聴きに来てくれる。お客さんだね。

「ありがとう。リボーンくんいつも聞いてくれて。」

「あーリボーン！こんなところにいたっ！…あ」

「あ」

「？お前ら知り合いか？」

side：ツナ

オレがリボーンを追いかけて公園へ来ると今朝ぶつかった女の子がリボーンと話をしていた。

「あ」

「あ」

「お前ら知り合いか？」

知り合いもなにも今朝…

オレが説明しようとしたら、女の子が口を開いた。

「今朝、わたしが余所見をしながら登校していたらぶつかってしまつて…助けてくれたんだよね」

「（ドキッ）う、うん…／＼／」

そう、今朝から思ってたけどこの女の子はとても可愛い。
なんか…守ってあげたくなるような子。

髪は優しい茶色のロングヘア！。今はツインテールをしている。

「てかりボーンお前も知り合いなのかよっ？」

「ああ、オレはいつも美歌の歌を聴きにきてるんだぞ。」

歌…？

「せつかくだしツナも聞いてくか？なかなかいいぞ。」

「えゝ／＼／＼恥ずかしいな…」

「聞いてみたいな。オレ！」

「じゃあ…でもオンチだよ？」

すう…

彼女が大きく息を吸って歌いだした。

その歌声はとても透き通っていて、オレの心に染み渡るようだった。
とても透き通っているけど…芯のある歌声に心を打たれた。
目をそっと開け、彼女を見ると…

とても綺麗な顔をしていた。

まるでそれは女神のようだった…

「…こんなカンジかな？」

パチパチパチ！

「すごい！綺麗な歌声！聞きほれちゃったよ！」

「ありがとう／＼／」

「な、言っただろう？オレの専属歌手だ」

「何かってなこと言ってるんだよ！…えと」

オレは失礼なことにまだ名前を名乗っていなければ聞いてもいなかった。

「天音美歌だよ。」

「お、オレは沢田綱吉^{さわだつなよし}」

「綱吉くん…だね。」

「ツナでいいよ！」

みんなにそう呼ばれているからね。

「じゃあわたしのこともみかでいいよ音」

きゅ、急に呼び捨て！

女の子になれないオレはぎくしゃくしてしまった。

「うん…／＼じゃあよろしく。みか」

「こちらこそ♪ツナくん♪」

そしてオレたちは帰った。また明日ここで会う約束をして。

途中帰っているとき、何度かリボーンに

「ニヤニヤしすぎだぞ」

と突っ込まれたけど、今日のみかの笑顔と歌声は忘れられなかった。

突然の訪問者（前書き）

お気に入り登録（？）をしてくださった方々ありがとうございます
す

そして、コメしてくださった方もありがとうございます！

もっと小説をよくするように頑張るので、よろしくお願いします

m (—) m

突然の訪問者

side : ツナ

みかと出会ってから数日。

オレは毎日のように彼女の歌を聴きにあの公園へ向かっていた。

なんでだろう？

自分でも公園に足を運ぶのが分からなくなるほど、みかの歌がいつの間にか好きになっていた。

そんなある日。

学校終わりのこと、オレはいつものようにみかの歌を聴きに公園へ向かおうとしたときのことだった。

「おい、ダメツナ」

「なんだよ、リボン。オレ今から行くところが……」

「どうせみかの歌聴きに行くんだろ？」

「う……………」

見事に凶星をつかれ、言葉を詰まらせてしまった。

まずい…コイツに変なことに勘づかれると…だいぶ厄介だぞ……

っていうかりボンっていつもいいときにひよこつと現れて、必要なときにはたいていいないんだよね……。ホントどうにかしてほしいよ。

「お前に会ってほしいやつ等がいるんだ。来てくれねえか？」

「オレに会ってほしいやつ等……………」

珍しいな…だいたいリボーンがこういふとき言うのは、「早く帰って勉強しろ」だとか「お前はボスとして…」的なことなのに……オレが考えごとをしていると、後ろから獄寺くんと山本がやってきた。

「10代目とリボーンさん！何の話ッスか！？」

「またマフィアごっこの話か？」

「なんかリボーンがオレにあわせたい人がいるらしいんだ。」

「何ッ！？そいつ等敵ッスか！？」

あ…。2人はこの小説に出てくるのは初めてだったね。今さっき話した。オレのことを「10代目」と呼ぶこのいかにも不良っぽいのは獄寺隼人《ごくでらはやと》去年、オレが1年のときに転入してきた子でどうやらイタリア人らしい。…で、見た目は誰でもが一目見たら、「ヤバイ」と思うほどの不良っぷり、タバコもすってるし、授業中に携帯やってるし、でも頭がいいという不思議な人。女子にもモテるんだ。どこかのファミリーらしくて、オレがボンゴレ10代目というつわさをどこかでかぎつけ、来たらしい。

「野球好きなヤツ等かもな」

このムダにさわやかなのは、山本武《やまもとたけし》野球部でさわやかで…モテ要素抜群の山本。家がすし屋で、前にお世話になったこともあったな……。オレの補修仲間でもある。屋上ダイヴ以来、常に一緒にいる気がする。リボーンがいつもやらかす「ファミリー強化」のことを「マフィアごっこ」と勘違いしているあたりからかなりの天然みたい……。

「んなワケねえだろっ」

「まあまあ…獄寺くん」

「お前等も来るか？」

「勿論です！」

「一応ボールもつてくか。」

山本すでに野球好きと思ってるし。

「んじゃ、ツナも行くよな？」

「…分かったよ」

そして、オレもしぶしぶついていくことになった。

申し送れたけど、オレはどうやらいつの間にか、ヨーロッパで最高権力を持つマフィア「ボンゴレファミリー」の10代目ボス候補らしい。（オレは嫌だけど）中1のとき、母さんが勝手に頼んだ家庭教師としてきたリボンが急にオレがボス候補という事実を述べてきた。だいたいそんなの嫌なんだよ…マフィアってアレだろ…？銃で普通に人撃つたり…殺したり…

はあああ、こんなコトみかには話せないな……。

side：みか

ツナとあの公園で知り合ってから数日。

ツナはあれから毎日来てわたしの歌を聴いてくれるようになった。

だからツナと話しているのがだんだん楽しくなっていた。心が温かくなっていくようだった。

そんなある日、いつものようにツナに会えると思ってきた公園にはツナはいなかった。

おかしいな…、いつもわたしより先にいるのに……。

「風邪でもひいたのかな？」

その日は歌を歌わずに、ツナを待っていた。
…けど、全然こなかった。

やっぱり風邪でも引いたんじゃないか……
お見舞い行こうかな？ あ、でも……

「わたし…ツナの家知らないんだった…。」

そうだよねっ。まだ知り合って間もないんだから…急に家に押しかけたら、迷惑だよねっ。

あはは…わたししたら…なれなれしいんだから…。

「…しょうがない。今日はもう帰ろうかな？」

そう思っ、公園内にあるベンチから立ち上がったら、後ろでボトツという何かが落ちた音がした。

「なんだろう…？」

音のした方に近づくと、鳥がケガをして倒れていた。

「大変！すぐに治療しなくちゃ」

わたしは持っていたハンカチを応急処置として鳥の羽に巻きつけ、痛くならないように、手でさすってあげた。すると…

パァア

光だし、鳥は元気になった。

「あれ？ケガ治った？自然治癒能力高いのね…」

ただ、わたしはケガの部分に手を添えただけ…それだけでケガが治ってしまった。

アレ…？

とりあえず、わたしは鳥を逃がし、家へと帰るのだった。

「ただいまー」

誰もいない家にあいさつ。

そして、寂しいけど毎回やるのが…

「おかえりなさいっ」と

そう、この挨拶だ。

あ！その小説読んでいる君！　わたしをそんなかわいそうな人を見る目で見ないでよっ！
同情はいらないわよっ！！

でも、そんなの気にしない。だって明後日には…

「久しぶりに会えるな…お父さんとお母さんに」

side:ツナ

リボーンにつれてこられたのは、オレんちだった。

「え…？お客様ってオレの家にもういるの？」

「ああ」

「10代目、いつでも戦えます。」

「ツナ…いつでも野球できるぜ」

この2人…やろうとしているコトが似ているようで似てないんだけど……

「ただいま……」

オレがそつと家に入ると…

「あら♪ツツ君♪あなたにお客様よ♪」

「あ…うん。ありがとう母さん。」

「はりきって沢山料理作っちゃったわ」

この人はオレの母親。沢田奈々《さわだ なな》なんていうか…マ
イペースでツツコミどころ満載で…っていうカンジの母親。誰で
も家にあげるところが唯一の悩み。

「お邪魔しています♪沢田綱吉君」

「初めまして。」

リビングでお茶を飲んでいたのは、2人の男の人と女の人でスーツをびしっと着ていた。

男の人はオレから視ても全然かつこいい人で…女の人は…なんだろう…？笑った顔が誰かに…？

でもとても綺麗な人だった。

「は…初めまして」

「コイツ等はボンゴレの同盟ファミリーである「ローゼンナイツファミリー」で、その男のヤツがNo.2で女のヤツがNo.1だ。」

え…No.1っていうことは…このやさしそうな女の人がボス…？

「同盟ファミリーっていうことは、敵じゃないんですね」

「野球する年齢じゃ…なさそうだな。」

なぜか獄寺くんと山本が哀しそうになっているのはおいといて。

「初めまして、ローゼンナイツボスの天音舞華《あまねまいか》です。」

「同じく天音直人《あまねなおと》だ」

同じ苗字…？

っていうか天音って…みかと同じ苗字…

「そうだぞ。ツナこの2人は数日知り合ったみかの両親だ」

「え？ええええええええええ！！？」

突然の訪問者（後書き）

どうでしたか？背景的にまだ黒曜編前のお話です
コメもじゃんじゃんお待ちしておりますのでどうぞ！
わたしに質問等ありましたら、是非どうぞ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1658o/>

そしてきみは今日も歌う...

2010年10月19日17時37分発行